

魏志倭人伝を考える
— 狗奴国について —

1 狗奴国の所在地

(1) 「魏志倭人伝」が記す狗奴国

「魏志倭人伝」は、女王卑弥呼が統括する 29 国からなる邪馬台国連合の国々以外の倭人の国々に関する記述は少ない。これは、「魏志倭人伝」が魏の冊報国である卑弥呼が統括する邪馬台国連合に関する記述を中心にし、その他の倭人の国については、卑弥呼や邪馬台国連合と関係がある範囲内で記述するにとどめ、あるいは「女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆和種なり。」などとその位置等を記すにとどめるという記述方法をとっていることによるものである。このようななかで邪馬台国連合に属さないにも関わらず狗奴国については字数を割いて記述しており、女王卑弥呼との関係について重要な内容を含んでいる。「(前略) 次に奴国あり。これ女王の境界の尽くる所なり。その南に狗奴国あり。男子を王となす。その官に狗古智卑狗あり。女王に属せず。」と「その八年(魏の少帝の正始八年。247 年)、(帯方郡の) 太守王頎官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭の載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。塞曹掾史長政等を遣わし、因って証書・黄幢を齎し、難升米に拝仮せしめ、檄を為りてこれを告諭す。」の 2 つの記述である。これらの記述は、狗奴国が卑弥呼が統括する邪馬台国連合のすぐ南にあり、男子の卑弥弓呼を王とする国であり、その官には狗古智卑狗という者がいる、さらに狗奴国は邪馬台国連合に属しておらず、卑弥呼と以前から対立し、卑弥呼を脅かす存在であることを示している。本項では、この狗奴国について考える。

(2) 狗奴国の所在地

狗奴国はどこにあったのであろうか。女王卑弥呼が統括する邪馬台国連合は、女王が都する邪馬台国、その北の対馬国、一大国、末盧国、伊都国、奴国及び不弥国と投馬国の 7 国、さらに「遠絶にして得て詳らかにすべからず」とする 21 国の合計 29 国であり、狗奴国は、この女王が統括する邪馬台国連合の境界が尽きる所の南にあると記している。

女王が都する邪馬台国は、筑紫平野(福岡県の筑後平野とこれに連続する佐賀県の佐賀平野の総称)にあると考えているので、「次に奴国あり。これ女王の境界の尽くる所なり。その南に狗奴国あり。」は、筑紫平野の、卑弥呼が都を置いている邪馬台国の周辺諸国のうち、その南端の奴国が女王国(邪馬台国連合)の境界が尽きるところにある国で、その南に狗奴国があるのである。なお、この奴国については諸説あるが、もともと「□奴国」とあったものが、模写されていく途中で□の部分脱落したものではないかと考えられており、帯方郡から邪馬台国までの行程において伊都国の次にある、戸数二万余戸の奴国とは別の国である。

拙著の論文「魏志倭人伝から見た邪馬台国概説」(季刊「邪馬台国」126 号)でも述べたが、狗奴国の官である狗古智卑狗が統括するところは、その名から熊本県北部の菊池市付近一帯を中心とする地域ではないかと考えている。熊本県北部と福岡県の筑後南部との境界付近には筑肥山地があり、この山地が邪馬台国連合と狗奴国との境界になっていたのではないかと考えているのである。

狗奴国の官である狗古智卑狗は、ククチヒコ、クコチヒコあるいはククチヒクなどと読まれている。

熊本県北部の菊池市から山鹿市にまたがる台地には国指定史跡の鞠智城がある。鞠智城はいつ頃築かれたかは不明であるが、「続日本紀」(797年完成。日本の歴史書である六国史の第二にあたる。)の文武天皇二年(698年)5月25日の条に「大宰府に命じて、大野、基肆、鞠智の3城を修理させた」とあることから水城、大野城、基肆城などと同じころ、白村江の戦(663年)で倭国が唐・新羅の連合軍に敗れたあとに、その来寇に備えて建設されたものではないかと考えられる。さらに、「文徳実録」(879年完成。六国史の第五にあたる。)の天安二年(858年)の条に「菊池城院の兵庫の鼓が独りでに鳴った」と記され、さらに「菊池城の不動倉が十一棟焼けた」と記されている。鞠智城跡からは炭化した米や焼けて赤く変化した礎石などが発掘されており、この菊池城は、鞠智城であることが判明した。「文徳実録」では菊池と書かれていることからこの地域は古くはククチと呼ばれ、これがキクチに転化し、菊池という漢字が当てられて現代まで引き継がれていると考えられる。

この地域には国指定史跡の方保田東原遺跡(熊本県山鹿市方保田字東原)がある。菊池川とその支流の方保田川に挟まれた小高い河岸段丘上にあり、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての、約35ヘクタール(うち11ヘクタールが国指定史跡)の集落遺跡で、幅8メートルの大溝や100棟を超える住居跡、石包丁型鉄器、鉄鏃、鉄斧をはじめとする140点以上の大量の鉄器が出土し、さらに鍛冶跡、10面を超える銅鏡、巴形銅器などが出土している。

方保田東原遺跡の140点以上の鉄器(うち鉄製武器40点)の出土数は、邪馬台国連合の領域と考えられる玄界灘沿岸地域、筑紫平野地域及び響灘沿岸地域の弥生時代の遺跡の、遺跡ごとの出土鉄器の数と比べるとこれらの遺跡出土の鉄器の数をはるかに超えるものである。方保田東原遺跡を含む地域が狗奴国の中で邪馬台国連合と直接対峙する地域であり、鉄製武器などが集積されていたのであろうか。

なお、方保田東原遺跡の発掘面積は、遺跡全体の5パーセントにも達しておらず、今後の発掘の調査によってさらに多くの鉄器などが出土することが期待される。

図1 狗奴国と邪馬台国(連合)



注 グーグル地図に邪馬台国と狗奴国の推定位置を加筆した。

○は邪馬台国連合と狗奴国の構成地域(表1参照)

図2 東側からみた方保田東原遺跡全景



注 文化庁国指定文化財等データベースによる。

○は概ねの方保田東原遺跡範囲(加筆)

(3) 狗奴国の領域

狗奴国は男王卑弥呼が統括する国で、29 国の連合国家である邪馬台国連合と相攻伐する間柄であり、卑弥呼が帯方郡に援助を求めるほどの強大な軍事力を持った国である。当時の軍事力を計る武器は鉄製武器である。鉄製の武器は、石製や青銅製の武器に比べ、はるかに鋭利で、かつ軽く、当時の最先端の技術を用いて作られるもので、武器に限らず農工具としても生産性は石製や青銅製をはるかに凌ぐ。このため、石製や青銅製の武器や農工具などは次第に鉄製品にとってかわられ、青銅製の武器などは次第に広形銅矛など非実用的な祭祀用具などになっていく。ここでは鉄製武器を手掛かりの一つとして狗奴国の領域を考えてみたい。

九州から出土した鉄器数を、「邪馬台国と狗奴国と鉄」（菊池秀夫 彩流社）によって遺跡が密集する河川の流域・平野別にみると表 1 のとおりで、玄界灘沿岸（遺跡数 81。鉄器数 760 点、16.9 パーセント）、響灘・周防灘沿岸（遺跡数 58。鉄器数 549 点、12.2 パーセント）、筑後川流域・筑紫平野（遺跡数 109。鉄器数 992 点、22.0 パーセント）、白川・菊池川・緑川流域（遺跡数 25。鉄器数 1492 点、33.1 パーセント）及び大野川・大分川流域（遺跡数 27。鉄器数 471 点、10.5 パーセント）の 5 地域で九州における出土鉄器数の 90 パーセントを越えており、九州の出土鉄器はほとんどこれらの地域に集中していると言っても過言ではない。中でも白川・菊池川・緑川流域は、遺跡数は少ないが、鉄器数では 33.1 パーセントで群を抜いている。この地域は、熊本県中・北部であり、これが狗奴国の領域の中心地域と考える。玄界灘沿岸、響灘・周防灘沿岸、筑後川流域・筑紫平野の 3 地域は福岡県、佐賀県と大分県の一部（日田地方。筑後川上流域）であり、邪馬台国連合の領域に相当する。この 3 地域は併せて出土鉄器数の 51.1 パーセントと全体の半数を占めており、邪馬台国連合も強力な軍事力を持っていたことがわかる。

九州の政治情勢は北部の邪馬台国連合と熊本県の中・北部を中心とする狗奴国に 2 分され、邪馬台国連合が北部九州の広い範囲に勢力が分散していることに比べ、狗奴国は熊本県の中・北部で、コンパクトにまとまり、女王が都する邪馬台国がある筑後川流域・筑紫平野の南に位置し、これに直接勢力を集中させ、圧力をかけることができ、女王卑弥呼にとっては脅威であったことが推測される。

表 1 弥生時代九州内の鉄器（鉄製武器、鉄製農工具等）の地域別発掘数 単位：件、点、%

地域名	遺跡 件数	遺構件 数	鉄器点 数	武器類							武器以外			
				鉄鏃	鉄刀	鉄剣	鉄矛	鉄戈	刀子	計	農工具	不明	鉄滓	計
玄界灘 沿岸	81	370	760 16.9	151 12.6	22	36	2	5	80	206 11.5	240	208	16	464 17.2
響灘・周 防灘沿 岸	58	336	549 12.2	147 12.3	14	23	5	4	102	295 16.4	176	78	0	254 9.4
筑後川 流域・筑 紫平野	109	669	992 22.0	192 16.0	23	25	4	9	97	350 19.4	485	152	5	642 23.8
白川・菊	25	334	1492	348	6	11	0	0	73	438	267	617	170	1054

池川・緑川流域			33.1	29.0						24.3				39.0
大野川・大分川流域	27	219	471	234	0	7	0	0	25	266	113	92	0	205
			10.5	19.5						14.8				7.6
日向灘沿岸	20	126	178	101	2	6	0	0	7	116	20	42	0	62
			4.0							6.4				2.3
その他	17	40	60	27	1	1	0	3	6	38	13	8	1	22
			1.3							2.1				0.8
合計	337	2094	4502	1200	68	109	11	21	390	1799	1314	1197	192	2703
			100.0							100.0				100.0

注 「邪馬台国と狗奴国と鉄」(菊池秀史 彩流社) から作成した。鉄器件数、武器類の計、武器以外の計の下段は比率 (%) で、筆者の加筆である。

大野川・大分川流域はどうであろうか。この地域の出土鉄器は 178 件、10.5 パーセントであり、侮れない勢力であるが、邪馬台国連合及び狗奴国の 2 大勢力のいずれに属していたのか、又は独立した第 3 の勢力であったのだろうか。確たる証拠はないが、私は狗奴国に属していたのではないかと考えている。

邪馬台国連合と考える 3 地域、狗奴国と考える白川・菊池川・緑川流域、それに大分川・大野川流域の各地域の出土物のうち、鉄製武器に限って比較すると、表 2 のとおりであるが、特に鉄製武器のうち戦場において遠方から敵を攻撃することができ、効果が高い鉄鏃の占める割合が邪馬台国連合の 3 地域では 57.5 パーセントであるのに対して、白川・菊池川・緑川流域は 79.4 パーセント、大分川・大野川流域は 88.0 パーセントである。さらに、細かくみると白川・菊池川・緑川流域のうち、阿蘇地域は、92.0 パーセントであり、大野川流域の竹田市は 91.2 パーセント、豊後大野市は 84.8 パーセントで突出した高率である。

表 2 出土した鉄製武器に占める鉄鏃

単位：件、(%)

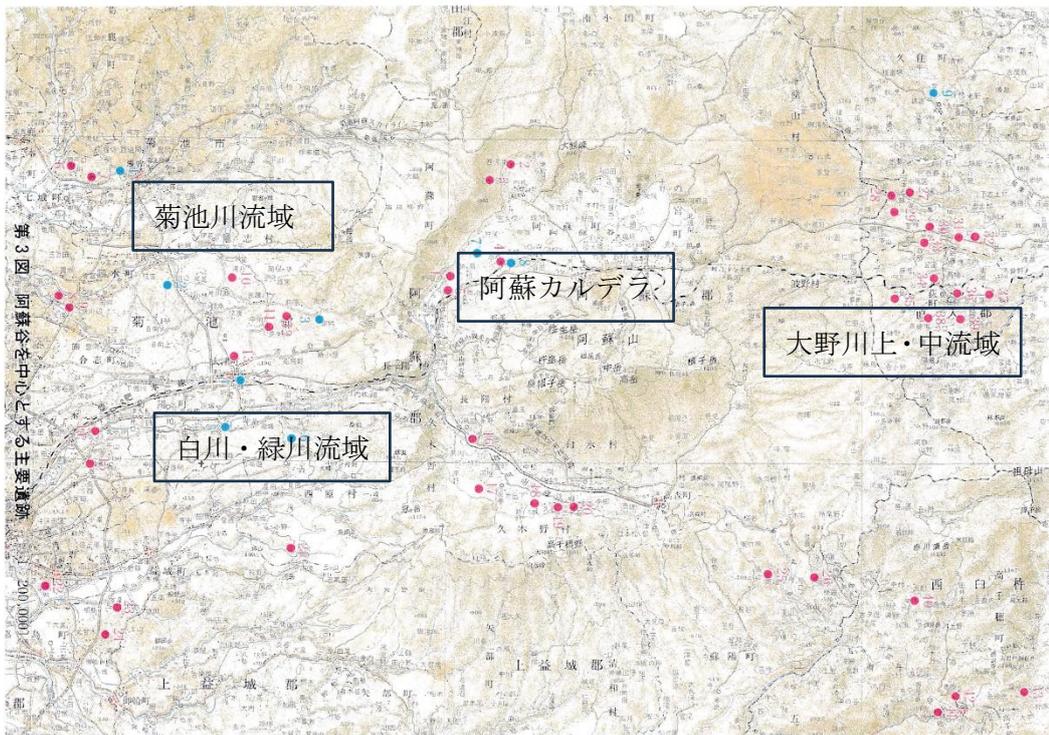
地域別	遺跡件数	出土鉄器総数 a	武器総数 b (b/a)	武器のうち	
				鉄鏃 c (c/b)	その他の武器 d (d/b)
玄界灘沿岸	81	760	206(27.1)	151 (73.3)	55(26.7)
響灘・周防灘沿岸	58	549	295(53.7)	147 (49.8)	148(50.2)
筑後川流域・筑紫平野	109	992	350(35.2)	192 (54.9)	158(45.1)
小計		2301	851(37.0)	490 (57.6)	361(42.4)
白川・菊池川・緑川流域	25	1492	438(29.4)	348 (79.4)	90 (20.5)
うち阿蘇地域	9	663	201 (30.3)	176 (87.6)	25 (12.4)
大野川・大分川流域	27	471	266 (56.5)	234 (88.0)	32(12.0)

うち竹田市（大野川）	15	177	102 (57.6)	94 (92.2)	8 (7.8)
うち豊後大野市（大野川）	7	207	105 (50.7)	89 (84.8)	16 (15.2)

注 「邪馬台国と狗奴国と鉄」（菊池秀史 彩流社）の「付・弥生時代鉄器出土遺跡七地域別一覧」を集計して作成した。一部改変（%を追記）した。

菊池川流域は、阿蘇外輪山を源流とする菊池川の中・下流域、阿蘇地域は阿蘇カルデラを源流とする白川の源流・上流域、白川・緑川流域は、白川の中・下流域と阿蘇外輪山を源流とする緑川の中・下流域、竹田市は大野川の上流域、豊後大野市はその中流域にある。大野川は大分県と宮崎県の県境をなす祖母山に本流の源流を発し阿蘇カルデラの東端を北上しており、カルデラの東から流下し、竹田市付近で本流に合流する。阿蘇地域と竹田市、豊後大野市は地理的に近い関係にあるのである。この3地域は、鉄器の出土が多く、その中で特に鉄鏃の占める割合が極めて高いという特徴があり、さらに地理的に近い関係にあることから、竹田市及び豊後大野市の地域は、阿蘇地域を含む白川・菊池川・緑川流域をその領域とする狗奴国の強い影響下にあったものと考えられる。

図3 白川・菊池川・阿蘇カルデラと大野川上流域の主要遺跡



注 1 「熊本県文化財調査報告第131集 狩尾遺跡群」（熊本県教育委員会）による。一部加筆（□の枠囲み）している。
2 ●と●印が遺跡の所在地

2 狗奴国と使訳通ずる所 30 国
(1) 使訳通ずる所 30 国の候補

「魏志倭人伝」は、「倭人は帯方の東南大海の中こくゆうにあり、山島に依りて国邑もとをなす。旧百余国。漢の

時朝見する者あり、今、使訳通ずる所三十国」という文から書き始められている。原文は「倭人在帯方東南大海之中依山島為国邑旧百余国漢時有朝見者今使訳所通三十国」である。

倭人は、帯方郡の東南の方向の大海の中の、山がちの島に国をつくっており、もとは百余国あって、この中で漢のときに朝見する者があった、魏の時代に使訳を通ずるところは30国である、というのである。これが倭人の住む国に対する「魏志倭人伝」の、言い換えれば陳寿の基本的な認識である。「使訳」とは使者と通訳と解釈するのが通説となっているが、ひろく使者、使節とする説もある。

では「使訳通ずる所三十国」とはどの国をいうのであろうか。「魏志倭人伝」に具体的な国名が記述されている国から考えてみる。これを挙げると

- ① 「郡より倭に至るには、海岸に循^{したが}って水行し、(中略)その北岸狗邪韓国に至る七千余里」とする狗邪韓国、
 - ② 狗邪韓国出発後、邪馬台国に至るまでに通過する対馬国、一大国、末蘆国、伊都国、奴国、不弥国の6国
 - ③ 「南、投馬国に至る水行二十日」とする投馬国、
 - ④ 「南、邪馬台国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月」とする邪馬台国、
 - ⑤ 「女王国より以北、その戸数・道里は得て略載すべきも、その余の傍国は遠絶にして得て詳らかにすべからず。」として国名のみを挙げている斯馬国以下の21国、
 - ⑥ 「これ女王の境界の尽くる所なり。その南に狗奴国あり」とする狗奴国
- である。

「魏志倭人伝」には、卑弥呼が魏の明帝^{めいてい}の景初2年(景初3年の誤り。239年)6月、大夫難升米等を派遣して魏に朝貢し、同年12月に明帝から「親魏倭王卑弥呼」に制詔されたと記されている。この時点で、女王卑弥呼が統括する邪馬台国連合は、魏を宗主国とする冊封体制に組み込まれたのである。対馬国、一大国、末蘆国、伊都国、奴国、不弥国、及び投馬国の7国と邪馬台国及び斯馬国以下の21国の合計29国はいずれも邪馬台国連合の構成国であり、これらが「今、使訳通ずる所三十国」に含まれることは疑いない。

なお、冊封体制とは、中国の皇帝が朝貢してきた周辺諸国の君主に官号・爵位などを与えて、君臣関係を結んで彼らにその国の統治を認める(冊封)一方、中国を宗主国とし朝貢してきた国を藩属国とするという関係をいう。冊封体制のもとでは、周辺諸国が中国皇帝に敬意を払う印としての朝貢を行うことが義務付けられている。朝貢では、周辺諸国の代表者である使節が貢物をする返礼として、宗主国が使節団の滞在費や貢物の数倍の返礼品を用意するのが常識であった。この返礼品が使節を派遣した国に膨大な利益をもたらす。時代は下るが、室町時代の将軍足利義満は、当時の明から「日本国王」の称号を受けて冊封国となり、朝貢によって莫大な利益を得た。

では残り1国はどこであろうか。候補として挙げられるのは、狗邪韓国と狗奴国の2国である。このうち、狗邪韓国は、拙著の論文「魏使が辿った邪馬台国への径と国々」の項でも述べたが、陳寿は、「魏志韓伝」においては狗邪韓国(弁辰狗邪国)を弁辰十二国の1国としており、「魏志倭人伝」においては帯方郡から対馬国以下の倭人の国に至る行程上の単なる中継地として扱っている。狗邪韓国は30国の一員とは考えられない。残るのは、狗奴国である。

(2) 魏と狗奴国

「使節を通ずる」には、冊封体制に組み込まれていない国が使節を派遣し貢物を献上する朝貢も含まれる。朝貢そのものには実質的な臣属関係という意味はない。冊封を受けることと友好関係を築くために使節を派遣し朝貢することとは別のものである。卑弥呼だけが使節を派遣し朝貢することができるのではない。時代は下るが五世紀の大和政権は倭の五王が南宋に遣使して倭国王の国号を与えられているが、その後の日本は600年代に隋や唐に遣隋使や遣唐使を派遣し、外交関係を結び、朝貢しているものの当時の日本は隋や唐の冊封国ではない。

卑弥呼と対立関係にあった狗奴国の卑弥弓呼にとっては、卑弥呼が「親魏倭王」に制詔されたことは極めて大きな脅威である。卑弥呼との対立が深まり交戦に及ぶこととなった場合に、魏が卑弥呼に援軍を送ることになれば、強大な魏の軍事力の前には狗奴国はひとたまりもないであろう。卑弥弓呼が、魏の攻撃の対象にならないよう魏と外交関係を結び、^{よしみ}誼を通じておくことを考えることは自然なことである。

これからは、筆者の想像である。おそらく景初3年(239年)6月、卑弥呼が魏に使節を送った直後に、これを知った卑弥弓呼も使節を送り、それ相当の貢物を持ち、狗奴国の実情、自らと卑弥呼との関係などを述べ、理解を求めたであろう。自らを倭国王に制詔するよう求めたかもしれない。魏は両者から陳情を受け、両国の国内事情、信頼性、軍事力、大陸・朝鮮半島とのかかわりなどのあらゆる情報の収集に努力を傾けるとともに自らの利害、特に敵対している呉との関係などを考慮し、いずれを倭国王とすることが魏の利益になるか熟慮したことであろう。その結果、魏は卑弥呼を「倭王」に制詔した。その年の12月である。卑弥呼が使節を送ってからすでに半年を経過している。魏が熟慮に熟慮を重ねた結果であろう。何が決め手になったのかはわからないが、鉄器の出土状況からみると軍事力、経済力においては卑弥呼と卑弥弓呼とはほぼ拮抗しているとみてよい。差があるとすれば、魏との地理的・歴史的距離であろう。卑弥呼の領域は九州北部にあり、古くから後漢と外交関係があり、後漢の冊封国(後漢光武帝の建武中元二年、57年)となっていた玄界灘沿岸の奴国や倭国王として初めて朝貢(後漢安帝の永初元年、107年)した^{すいしやう}帥升、大陸・朝鮮半島と^{してき}「市籩」を行ってきた対馬国・一大国を含んでいる。これに対して狗奴国は、九州中部にあり、大陸、朝鮮半島との交易にはやや地理的には遠方にある。卑弥呼に比べれば、交易などの頻度も少なかったであろうし、大陸・朝鮮半島などとの交易も後発地域であったろう。魏にとっては両国の情報については卑弥呼のほうがより豊富にかつ詳細に把握できたであろうし、「魏志倭人伝」を読む限り呉との外交・交易関係はなく、より安心できる存在であった。魏がこれらを考慮し、卑弥呼を選んだのではなかろうか。後述するよう^{よしみ}に呉との交易があったかもしれない狗奴国は選び難い存在であったことも考えられる。

これ以降、男王卑弥弓呼は一層魏に対する朝貢に力を入れ、魏との関係を親密して、卑弥呼との関係のさらなる悪化に備えるとともに、鉄器の入手に努め、邪馬台国連合に迫るほどの鉄器を入手したのではなかろうか。そして、魏の少帝の正始八年(247年)、狗奴国の男王卑弥弓呼がそれまでは小競り合い程度だったであろう卑弥呼との確執を超え、攻撃を仕掛けた。このころ、卑弥呼は王に共立されてから既に60年以上にもなっていた。高齢による体力の衰えに加え、強い権力基盤を持たず、鬼道能力によって支えられていた卑弥呼が247年3月24日の皆既日食の発生を予測・阻止できなかったなどその能力の衰えを露呈し、巫女女王としての権威を失墜し、卑弥呼を共立した諸国からの信望を失い始めていた。これをみて卑弥弓呼が卑弥呼に戦いを挑んだのではなかろうか。領土拡張の好機と捉えたのかもしれない。

因みに、247年3月24日の皆既日食は福岡市の上空では皆既日食である。17時24分ごろから食が始まり、太陽は次第に細くなりながら18時27分ごろ皆既日食となって玄界灘に沈んでいくものである。内陸部の筑紫平野においては皆既日食とはならなかったものの太陽が次第に細くなり、上部をわずかに残しつつ沈んでいくものである。また、九州地方の日食は、翌248年9月6日にも起こっている。これらの現象は「魏志倭人伝」が「その俗挙事行来に、云為する所あれば、輒ち骨を灼きてトし、以って吉凶を占い、先ずトする所を告ぐ。」というような、何事を行うにもまず占いを行って、その告げるところに従うとする社会においては、太陽が真っ暗になって落ちていく、すなわち消滅していくことを予測・阻止できなかった卑弥呼に対する失望は計り知れないほど大きかったと思われる。

卑弥呼はこの卑弥弓呼との「相攻撃する状」を帯方郡に報告し援助を求め、帯方郡は塞曹掾史張政等を派遣した。張政は少なくとも自らを護衛する軍を伴っていたであろうし、万が一の武力衝突に備えて必要な軍備も整えていたであろうが、「魏志倭人伝」においては張政が軍を使用し、また、冊封国である邪馬台国に一方的に肩入れした形跡はない。「魏志倭人伝」は、「塞曹掾史長政等を遣わし、因って証書・黄幢を齎し、難升米に拝仮せしめ、檄を為りてこれを告諭す。」と述べた後は「卑弥呼以て死す。」と卑弥呼の死に触れ、さらに「大いに冢を作る。径百余歩、」と卑弥呼の塚（墓）の造営を記述している。これを「魏志倭人伝を読む」（佐伯有清）に沿って説明すると、「詔書」は魏からの詔を記した文書、「黄幢」の「幢」は古代の中国にあって軍事指揮や儀仗行列にもちいられる旌旗（旗、幟）のことで「黄幢」は黄色の幟のこと、「檄」は木簡に書かれた触れ文、諭し文、廻状などの文書のこと、ここでは軍事にかかわる木簡文書のこと、「告諭」は告げ諭すこと、である。長政が詔書と黄幢を難升米に下し、軍事にかかわる木簡を作って告げ諭したということである。恐らく狗奴国にも檄を為って告諭したであろう。軍事力を背景にしているが、直接軍事力を行使した形跡はない。権威・人望が失墜した卑弥呼を観た張政の、「卑弥呼以て死す」とする卑弥呼の死と自らの軍備を背景とした調停によって収束したと考えられる。狗奴国の男王卑弥弓呼は卑弥呼の死を知り、張政の調停を受け入れて軍を引くことにより、魏の冊封国である邪馬台国連合に戦いを挑んだにもかかわらず、懲罰を受けることもなく和平を得たのである。狗奴国の備えは成功したのである。

なお、「以て死す。」（原文は「以死」）について、森浩一氏はその著（「倭人伝を読みなおす」）において、岡本健一氏が中国史書二十五史の「以死」の用例七六一例を検討し、「自然死ではない。刑死や賜死・諫死・戦死・自死・遭難・殉職・奔命（過労死）・事故死などで、その結果“非業の死を遂げた”ものばかりである。」と分析したことを紹介している。

また、狗奴国のその後については、これを記した文献はなく、遺跡の出土物からも判明しないが、壹与が継いだ邪馬台国連合と共存したのではないかと考える。晋書の「四夷伝・倭人」の条に「其後貢聘不絶及文帝作相又数至泰始初遣使重詔入貢」とある。これは、その後（卑弥呼の公孫氏滅亡後の朝貢の後）も貢聘（入貢・訪問）は絶えず。文帝（司馬昭）が（魏の）宰相となるとまた数度入貢してきた。（晋の司馬炎・武帝の）泰始元年（265年）に遣使し、幾度か詔を重ねて朝貢した、ということである。また、晋書武帝紀には「泰始二年（266年）十一月己卯、倭人来遣使重詔入貢」とある。これによれば、倭人の朝貢は晋（265年～316年）になってからも続いており、この泰始二年を最後として以降は南朝宋（421年～478年）の武帝の永初二年（421年）に倭王讃が朝貢するまでは中国正史における倭人の国に関する記述は途絶える。日本書紀の神功皇后紀には「（神功皇后の）六十六年。是年、晋の武帝の泰初（泰始の誤り）の二年なり。晋の起居の注に伝はく武帝の泰初の二年の十月に、

倭の女王、訳を重ねて貢献せしむという。」とある。日本書紀では、魏志倭人伝にいう卑弥呼を神功皇后になぞらえているのでこの「倭の女王」はおそらく卑弥呼の後継の壹与を指すと考えられる。そうとすれば、邪馬台国連合は266年までは存続しており、これと共存した狗奴国も少なくとも266年までは継続していたと考えるのである。因みに、神功皇后はその存在が疑問とされており、存在した人物としても卑弥呼の年代よりも約120年後の人と考えられている。

(3) 狗奴国と呉

a 東アジアの情勢

狗奴国の遺跡からは大量の鉄器が発掘されている。この鉄器入手の手段については、文献上の資料はないが、今まで述べてきたように、魏に朝貢・交易を行い、入手していたのではないかと考えるが、このほかにも考えられることはある。魏と対立していた呉との交易があったのではないかとということである。「魏志倭人伝」には、狗奴国が呉と外交関係を結んでいたことを窺わせる記述はなく、また、「三国志」の「呉書」にもない。「三国志」においては、呉は中国の正統の王朝とは認められておらず、「呉書」には夷蕃伝がそもそもないので、「呉書」からはうかがい知ることができないのである。狗奴国が魏あるいは呉と使訳を通じていたかどうかは「三国志」からは判明しないのである。

当時の東アジアにおいては、魏、呉、蜀が鼎立して相攻撃しあう中で、呉は魏の北方の遼東に割拠していた公孫氏や高句麗と度々協力しあっている。嘉禾元年（呉の年号。232年）孫権が馬匹を求めるといふ名目で、使者を海路遼東に派遣し、嘉禾2年（233年）公孫淵を燕王に冊封し、公孫淵の使者に燕王に冊封した証拠の品々を持たせて返し、これに1万人の呉の軍士を同行させた。嘉禾3年（234年）使者を高句麗に派遣し高句麗王を單于に冊封した。さらに呉は、魏の攻撃に備えて公孫淵から要請された援軍を遼東に送ったが、公孫氏政権の滅亡（魏の景初2年（238年）8月）に間に合わず、赤烏2年（呉の年号。239年）3月、遼東駐屯の魏の守備隊を襲撃してその配下を捕虜として帰国している。このように呉は公孫氏や高句麗と結んで北方から魏を牽制しようとしていたのである。

なお、これらの国々の位置関係は図3のとおりで、呉は遼東に度々軍を派遣しているが、距離関係だけから見ると呉と倭国の距離は呉と遼東の距離とほぼ同じであるように見えるし、呉はかなり遠方の地に海路大軍を送り込む航海能力があったことが窺われる。

図4 三世紀の東アジア



注 「邪馬台国と倭国—古代日本と東アジア」(西嶋定生)による。

b 狗奴国と呉

このような東アジア情勢の中で呉が当時の倭人の国にも使いを遣わし、これに応じて呉と外交・交易を行っていた倭人の国があることは容易に推測できる。狗奴国がある熊本県中・北部は邪馬台国よりも呉に近く、この外交・交易を行っていた国の一つが狗奴国ではないかと考えるのである。公孫氏が帯方郡を設置し、韓と濊を伐つと、倭は帯方郡に属することになるが、狗奴国と呉の関係を把握し脅威と感じていた卑弥呼は、魏が公孫氏を滅ぼす(238年8月)と、直ちに魏に使節を送り外交関係を求めた(239年6月)。魏が卑弥呼を「親魏倭王」に制称すると、狗奴国は呉との友好関係を一層深めたことは考えられるのである。

考古学の面からは狗奴国と呉との交易があったことが推測される遺物がある。熊本県人吉市の才園古墳からは鍔金獸帯鏡(肥後国球磨郡免田才園古墳出土品。国の重要文化財)が出土しており、この鏡について中国の鏡の研究者である王士倫氏が三国志時代の呉で作られた鏡と判定している。なお、鳥居原狐塚古墳(山梨県)から赤烏元年(呉の孫権の年号。238年)の、安倉高塚古墳(兵庫県宝塚市)から赤烏七年(244年)の紀年銘鏡が出土していることから狗奴国以外にも呉と交易していた倭人の国があったことがうかがわれる。

なお、考古学者で、古代の日本・大陸の鉄に詳しい村上恭通氏の分析によると弥生時代後期中葉以降、中部九州と北部九州の鉄器の普及について異なった様相がみられるという。氏の分析を抽出して紹介する(「倭人と鉄の考古学」から抜粋)。

「さて、続く(弥生時代)後期中葉以降は鉄器の普及量がますます増加する一方で、中九州・東九州地方には舶載鉄器の流入が途絶えるようになり、北部九州とは異なる様相がみられる。これは前段階ま

でみられた北部との連動性や流通の背景に変容が生じたことを示唆している。つまり経済圏、風習圏、舶載青銅器文化圏といった北部九州を頂点とした重層的な世界が形を崩しはじめたのである。事実、北部九州、東北部九州、東九州、南九州と鉄製道具の組成に地域ごとの特徴が現れるようになった。さらにミクロな視点でみると、隣接する河川流域間や一つの河川においても上、中、下流域においても鉄器の形態や組成に違いがみられる。」

この後期中葉以降の中九州・東九州地方に舶載鉄器の流入が途絶える原因の一つに狗奴国と邪馬台国連合の対立があったのではなかろうか。そしてこれが次項に述べる狗奴国の鉄器自前生産指向の可能性の背景になったのではなかろうか。

3 狗奴国と鉄

(1) 熊本県中・北部の鉄製錬の可能性に触れた文献

狗奴国の領域である中九州・東九州地方に舶載鉄器の流入が途絶えたことから、狗奴国が自前で製鉄を指向したということが考えられる。狗奴国の領域である熊本県中・北部には鍛冶遺構が検出された遺跡が多数存在する。特に、阿蘇地方には、阿蘇火山を起源とするリモナイト（褐鉄鉱。湖沼鉄とも呼ばれる。）の有名な鉱山がある。阿蘇のリモナイトは、鉄分（Fe）を重量比で 69 パーセントほど含み、精錬は比較的低温で可能といわれている。また、大野川流域からは菱鉄鉱が産する。さらに阿蘇周辺地域の弥生時代後期の集落遺跡からは多量の鉄器、鉄滓の出土がみられ、多数の鍛冶遺構も検出されている。阿蘇周辺地域は、九州島中央部に所在し、交易による鉄素材の入手が容易な海岸からは遥かに遠い内陸の山中にある。この地方においてなぜ大量の鉄器、鉄滓が出土するのであろうか。この地域から弥生時代に製鉄が行われていたとする明確な遺構は発掘されていないが、このリモナイトを鉄原料とする製鉄がおこなわれていたのではないかと推測されているのである。

「熊本県の歴史」（山川出版社）において「これらの遺構・遺物の分析から、拠点集落では鉄製品は供給され、製品の交流についても一部を除いて移動の範囲はあまり広くなかったとされている。また鉄素材の供給に阿蘇外輪山内部やその他の地域で算出される鉱石を原料として、拠点集落周辺で精錬したとする説がだされている。」と阿蘇地域において製鉄が行われていたのではないかと考えに触れている。

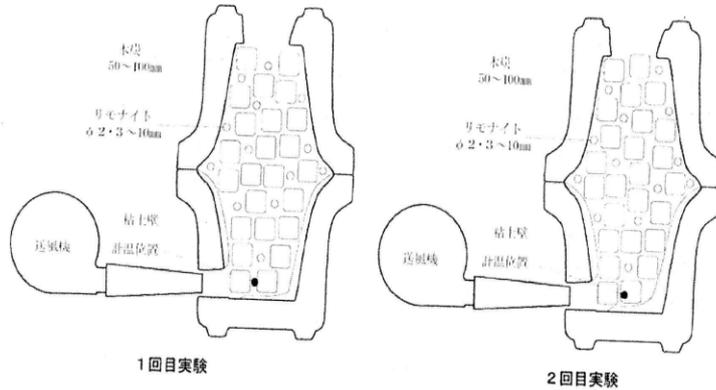
また、村上恭通氏は中九州において現地に鉱山がある菱鉄鉱や褐鉄鉱を使った製鉄・精錬が行われていた可能性を述べている。詳細は、別稿（「魏志倭人伝を考える－鉄について－」参照）に引用するが、同氏は「彼の地（朝鮮半島の弁辰）での経験者が、九州でも採鉱から製鉄にいたる工程を試みた可能性は否定できない。事実、中九州には朝鮮半島では使用が認められない菱鉄鉱や褐鉄鉱を原料とする鉄器がみられる。菱鉄鉱であれば大分県大野郡にその鉱山があり、褐鉄鉱は熊本県阿蘇郡に有名な鉱床が存在する。また中九州の鍛冶遺構では、しばしば表面に熔融状態を残す指先大の鉄塊が多数発見される。これは褐鉄鉱を精錬する際に生成する小型鉄塊の特徴にきわめて近似している。」と述べている（「倭人と鉄の考古学」から抜粋）。

(2) リモナイト（阿蘇黄土）の精錬実験

リモナイトを使用した製鉄について、広島大学院文学研究科の野島永、平尾英希両氏は、広島大学考古学研究室紀要第7号（2015）において、（株）日本リモナイトから提供されたリモナイト（褐鉄

鉾。阿蘇黄土)を還元して精錬する簡易な実験を行ったことを発表している。実験は、耐火煉瓦で土台、囲いを作り、内部に耐火粘土を充填して炉を固定し、耐火性の高い珪藻土の練り物で作られた七輪を上下に二つの口縁を合わせて炉とし、七輪の下部側に粘土を貼り込み、送風機で下窯となる七輪の送風口に向けて送風した。実験は2回である。

図5 リモナイトによる精錬実験炉図



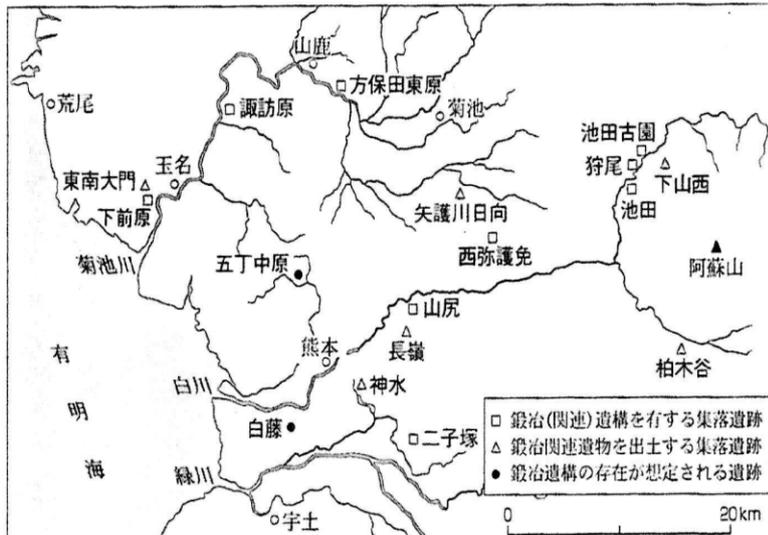
注 「広島大学考古学研究室紀要」(第7号2015年)による。

その結果、1回目に500gのリモナイトから約66.2g(3mm以下の含鉄物質15.9g、4~9mm15.6g、10mm以上34.7g)の、2回目に960gのリモナイトから84.9g(3mm以下の含鉄物質20.3g、4~9mm28.3g、10mm以上36.3g)の含鉄物質を得ている。なお、送風管(羽口)の先端付近の設定温度は1150度と1200度である。(株)日本リモナイトが公表している阿蘇カルデラ内の明神山鉾床のリモナイトの鉄(Fe)は重量比で69.08%であり、赤鉄鉾、磁鉄鉾に匹敵するほどの鉄が含まれている。この精錬実験は、簡易な設備でリモナイト(阿蘇黄土)から鉄を製錬することができることを実証したものである。

(3) 遺跡発掘調査報告書にみる精錬の可能性

熊本県中・北部の遺跡には、鍛冶遺構が検出された遺跡が数多くあり、その中には製鉄が行われていたのではないかと推測されるものも多い。

図6 熊本県中・北部の弥生時代後期後半の鍛冶遺構



注 「県史43 熊本県の歴史」（松本寿三郎ほか）による。

- a その中で、阿蘇地域にある狩尾遺跡群からは大量の鉄器、鉄滓が出土している。特に同遺跡群の湯ノ口遺跡からは、ほとんどの住居址から鉄器が出土し、鍛冶遺構を検出した住居址が5棟、鉄滓を出土した住居址は12棟ある。この狩尾遺跡群の報告書を一部抜粋して紹介する。（詳細は『季刊「古代史ネット」6号「魏志倭人伝を考える－鉄について－」』参照）

「最後に何ゆえに狩尾遺跡群で、鉄製品の生産がなされたかを考えたい。鉄製品の出土状況はほとんど使い捨てであり、破損品を補修あるいは回収して再利用されていない。これは生産地ならではの鉄製品の消費状況であるが、仮に舶載品である鉄素材にすれば、あまりに浪費的な消費に過ぎ、また陸揚げ地点からもかなりの遠隔の山間地で地金を鉄製品に加工する必然性は乏しい。こうした困難は、ただひとつ地金は舶載品でなく在地での製鉄からなされたとして氷解するものであるがこの解明は今後の課題である。なお狩尾遺跡群の近くには戦前まで稼働していた鉄鉱山があり、また遺跡の背後は強風が吹き上げる外輪山南麓で、技術があれば十分に製鉄を可能とする。」（狩尾遺跡群の報告書（第七章総括）（「熊本県文化財調査報告書第131集 狩尾遺跡群」1993年 熊本県教育委員会）。

- b 阿蘇カルデラ内の下扇原遺跡のSB46 竪穴住居跡からは半熔融状態の鉄片が鍛冶滓と熔着して出土している（KON-1 熔着遺物）。この遺物の金属学的分析からは、1180～1310° Cの高温が発生した可能性が指摘されており（大澤 2010）、精錬を行うための高温を発生させる技術があった可能性があることが記されている（同上報告書及び同上『季刊「古代史ネット」6号参照）。

参考文献

- 石原道博編訳 「新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝—中国正史日本伝（1）」岩波文庫 （株）岩波書店 1951年
 全訳注 藤堂明保・竹田晃・影山輝國 「倭国伝 中国正史に描かれた日本」講談社学術文庫 2011年
 佐伯有清 「魏志倭人伝を読む 上下」 歴史文化ライブラリー105 吉川弘文堂 2000年

- 西嶋定生 「邪馬台国と倭国—古代日本と東アジア」 吉川弘文堂 2011年
- 森浩一 「魏志倭人伝を読みなおす」 筑摩書房 2010年
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 校注 「日本書紀(二)」 岩波書店 1994年
- 榎原英夫 「邪馬台国への径—「魏志東夷伝」から「邪馬台国」を読み解こう—」 海鳥社 2015年
- 熊本県教育委員会 「熊本県文化財調査報告書第131集 狩尾遺跡群」 熊本県教育委員会 1993年
- 熊本県教育委員会 「熊本県文化財調査報告書第257集 小野原遺跡群」 熊本県教育委員会 2010年
- 松本寿三郎、板楠和子、工藤敬一、猪飼隆明 「県史43 熊本県の歴史」 山川出版社 1999年
- 野島永・平尾英希 「リモナイトによる製錬実験」 「広島大学考古学研究室紀要」 第7号 2015年
- 菊池秀史 「邪馬台国と狗奴国と鉄」 彩流社 2010年
- 塩田泰弘 「魏志倭人伝から見た邪馬台国概説」 「季刊「邪馬台国」126号 梓書院 2015年
- 塩田泰弘 「魏使が辿った邪馬台国への径と国々」 季刊「邪馬台国」131号 梓書院 2016年
- 小南一郎訳 「正史 三国志—陳寿 裴松之注—」 4、8 筑摩書房 1993年
- 中澤護人 「鋼の時代」 岩波書店 1964年
- 浅井壮一郎 「古代製鉄物語 「葦原中津国」の謎」 彩流社 2008年
- 村上恭通 「シリーズ日本史のなかの考古学 倭人と鉄の考古学」 青木書店 1998年
- 村上恭通 「古代国家成立過程と鉄器生産」 青木書店 2007年
- 新日本製鉄(株) 「鉄と鉄鋼がわかる本」 日本実業出版社 2004年
- 山本 博 「古代の製鉄」 学生社 1975年
- 新日本製鉄(株) 広報企画室編 「鉄の文化史—五千年の謎とロマンを追って」 東洋経済新報社 1984年
- 新井 宏 「金属を通して歴史を観る 24 鉄生産の開始時期(1)」 2001年
- 新井 宏 「金属を通して歴史を観る 25 鉄生産の開始時期(2)」 2001年

塩田 泰弘 (しおた やすひろ)



1945年熊本県生まれ。

2012年退職時に友人に勧められて大学の古代史に関する公開講座を受講したことから、従来からの古代史好きが高じてのめり込む。現在、大学の公開講座、カルチャーセンターの講座、講演会等に通り、諸先生の著書、遺跡の発掘報告書などを購読するなど、勉学に勤しんでいる。

著作論文

「季刊 邪馬台国」(梓書院) 掲載論文

「季刊 邪馬台国」126号 「魏志倭人伝からみた邪馬台国概説」

「季刊 邪馬台国」131号 「魏使が辿った邪馬台国への径と国々」

季刊「古代史ネット」掲載論文

季刊「古代史ネット」第2号 「魏志倭人伝」の行程と「水行十日陸行一月について」

季刊「古代史ネット」第6号 「魏志倭人伝を考える～鉄について」

季刊「古代史ネット」第7号 「魏志倭人伝を考える～斯馬国について」

季刊「古代史ネット」第8号 「魏志倭人伝を考える～絹・絹織物について」

季刊「古代史ネット」第9号 「魏志倭人伝を考える～魏使はなぜ末盧国と不弥国に行ったか」

季刊「古代史ネット」第10号 「魏志倭人伝を考える～髪型と衣服形態について」

季刊「古代史ネット」第11号 「魏志倭人伝を考える～鯨面文身について」

季刊「古代史ネット」第12号 「魏志倭人伝を考える～数値について」

季刊「古代史ネット」第13号 「魏志倭人伝を考える～投馬国について」